慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	B. H. スリッヘル・ ファン・ バート著 速水融訳 西ヨーロッパ農業発達史(慶應義塾経済学会経済学研究叢書9)
Sub Title	B. H. Slicher van Bath, De agrarische geschiedenis van West-Europa (500-1850), Utrecht/Antwerpen, 1962.
Author	梅村, 又次
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.11 (1970. 11) ,p.864(60)- 867(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19701101-0060
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19701101-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書　評

B. H. スリッヘル・ファン・バート著
速　水　　融 訳

『西ヨーロッパ農業発達史』
（慶應義塾経済学会経済学研究叢書 9）

B. H. Slicher van Bath, De Agrarishe Geschiedems van West-Europa (500-1850), Utrecht/Antwerpen, 1962.

本書は“西欧農業”の6世紀から19世紀中葉へかけての発達を主題としたきわめて野心的な農業史の著作である。ヨーロッパ風の洗練というのであろうか，論筆は終始たんたんと進められていて，肩をいからした売らんかなの姿勢はまったくみられないけれども，反復読み進むうちに，本書がそのさりげない進行の裡に著者の強烈な主張と野心的な挑戦を巧みに盛込んでいることに気付いてくるのである。それだけに，経済史には素人の私が果してどこまで著者のさりげない挑戦に対して感受性を示しえたかは，まことに心もとないところである。

著者が西欧諸国の農業ではなしに“西欧農業”というユニークな把え方をしている点にまず注目したい。この見方は，ローマ時代の経済システムの終った6世紀から各国独自の農業保護政策がまさに登場しようとする19世紀中葉までの時代には，北海をとりまく諸国（イギリスとアイルランド，南北ネーデルラント，フランス，ドイツ，アルプス地方）によって形成される地域の農業は，多くのしかもしばしば重要な意味をもつ地域差をその中に含みながらも，なおかつ本書の検討の対象として十分意味のある一つの統一体としての“西欧農業”の実態を保持していた，という認識に発している。この観点を敷衍した一層の論議はみられないけれども，この“西欧農業”という把え方の有効性についての論証は，本書の全体によって与えられているとみるべきであろう。しかし，著者のそうした意図と多大の努力にもかかわらず，本書を組立てている部品としてのデータは，農業の組織的調査が広く行なわれている今日とは違って，その地理的ひろがりにおいても，またその歴史的継起についても多分に断片的たることをまぬかれえないので，“西欧農業”の統一像が常に十分鮮明であるとはいいがたい。とはいえ，歴史研究の越えがたい制約を考慮するなら，過度の一般化を厳にいましめて経験科学の立場を貫こうとする著者の姿勢をむしろ積極的に評価すべきであろう。

本書が多くのスペース（低目にみても3割のスペース）をさいて“西欧農業”の技術的側面の検討に当てていることは，類書にはみられない本書のきわめてユニークな特徴となっている。産業が技術と経済の交渉の場であることを思えば，技術的側面の検討は必須のことである。この当然のことがこれまで何故か怠られてきたのだから，これだけでも本書の貢献は高く評価されてよい。しかも，本書はたんなる農書の解説や農業技術学のテキストの引き写しといったものではない。実地に行なわれていた作物，家畜，農具，農作業慣行などを技術と経済の接点において把え，農業経営の場におけるその相互関連を明らかにし，さらにその経済的意味の検討にまでおよんでいる。とくに“西欧農業”の実際に接する機会に恵まれないわれわれにとっては，本書はまことに貴重な文献といわねばならない。技術的側面に関する一見些細な知識が経済分析にとっていかに重要なものであるかを示唆する興味深い事例をあげよう。本書によれば，西欧では慣行的に地代は収穫の 1/3 であったという。これはわが国の水田小作料の 1/2 とくらべてはなはだ低率である。ところが，中世後期から近世へかけて西欧の穀作では種子は収穫の 1/3 であって，幕末期の稲作における 1/20 とくらべて著しく多い。この技術的条件の差異を考慮して，収穫から種子相当量を控除した純収穫に対する地代の割合を計算してみると，西欧の穀作が 1/2，わが国の稲作が 10/19 となって，両者ほぼ同等である。これは勿論他の費用項目を考慮に入れないまったく暫定的な分配率の計数でしかないけれども，わが国の地代負担がとくに著しく重いとみる通説にはなお検討の余地のあることを示唆するものといえよう。

ここ20年ほどの間の *Economic History Review*（英）や *Journal of Economic History*（米）などをみると，経済史の研究と経済発展論の研究が相互に著しく接近してきて，往時のようにその間にはっきりした境界線を引くことがますます難しくなってきたのに気付くであろう。それは，経済史の著作が第一次的には経済社会の質的側面よりはむしろその量的側面に注目するようになって，経済社会の構成の不連続な変革よりは経

済そのものの連続的な変動の過程をますます強調するようになったことによるものである。こうした経済史研究の新傾向を強調して，一部では New Economic History ということもいわれている。本書はたしかにこの方向での代表的著作の一つである。さらにいうなら，本書はこうした経済史研究の特徴をもっとも大胆に打ち出した著作だといってもよかろう。

ここでわれわれの関心事は，本書が6世紀から19世紀の中葉へかけての“西欧農業”の発達をいかなる理論的フレームワークをもって統一的に把えんとしているのか，著者の理論モデルの性格とその具体的問題領域への適用の有効性いかんにある。この辺から本書の内容に入って行きたいと思う。

本書では，まず農業の発展に影響をおよぼす諸要因とその相互依存関係を示すフローチャートによって著者の理論的フレームワークの粗筋が提示され（第1部），これをうけて“西欧農業”の発展過程が直接的農産消費の時代（第2部）と間接的農産消費の時代（第3部）に分けて展開されている。ここに直接的農産消費の時代（500—1150年）とは物々交換の現物経済をいい，間接的農産消費の時代（1150—1850年）とは市場経済を指すものである。この発展段階論の踏襲は著者の方法論の主流とはどうにも不調和であって，本書の色彩をむしろ混濁させているようにみえる。それはともあれ，この段階区分に対応して，フローチャートも現物経済と市場経済の2つ用意されることになる。しかし，第1部の論議は大部分現物経済時代の農業に費されていて，市場経済にふれるところは少なく，市場経済時代の農業についての理論的考察の詳細は第3部の物価および賃金の章に譲られている。

現物経済時代のフローチャートは環境，人口，開発面積，技術，家畜および肥料の6つの要因を含んでいる。ここで著者のとくに強調するところは，(1)農業発展の起動力は消費者としての人口増加であること，(2)開発面積→家畜→肥料→開発面積の回路が農業の発展に対するブレーキとして作用すること，の2点である。前者については立入った論議の展開はない。おそらく自明のこととみているのであろう（人口起動力仮説に関心の深い読者は，Ester Boserup, *The Conditions of Agricultural Growth*, 1965 を参照）。後者は古典派経済学以来馴染の収穫逓減の技術的内容をなすもので，著者の解説は委細をつくしている。

第2部は中世前期の“西欧農業”の検討に当てられている。中世前期の西欧社会はローマ時代の貨幣経済からの後退の結果としての現物経済の社会で，そこでの封建制や荘園制の成立は現物経済への適応であったという。この著者の主張に対してはおそらく専門家の間で論議の多いところと推察されるが，たしかに一個の興味ある観点とはいえよう。

中世前期の農業上の変遷を要約すると，およそ次のようである。

ローマ時代	6世紀より	8世紀より	10世紀より	12世紀より
耕地上に住居のないもの		耕地上に住居のあるもの		
方形耕地	開放耕地	方形耕地 エンクロジャア （森林地帯）	開放耕地 （集団開墾地）	
二圃制	高畝栽培	自由三圃制		規制三圃制
牡牛			馬	
無輪犂	有輪犂			

これによると，ローマ時代の“西欧農業”は地中海沿岸で発達した Dry Farming の直輸入農業であったことがわかる。6世紀頃からの排水に便利な開放耕地と有輪犂による高畝栽培の導入を経て，人口増加によって促進された二圃農法から自由三圃農法への転換をもって，温暖多湿の気候条件に適合した“西欧農法”が8世紀頃に完成する。これはいわゆる“西欧社会”の成立の経済的基盤を用意したものとしてきわめて重要な意味をもっている。三圃農法によるオートの増産と馬具の改良をうけて，10世紀頃から馬の導入が進んだ。これは犂耕や運搬の能率を著しく改善し，耕地の拡大を容易ならしめた。人口増加は草地の耕地化を促進したから，家畜のための草地の不足をきたし，休閑地放牧の必要が緊急のこととなった。12世紀に始まる強制耕作（規制三圃農法）は休閑地放牧のための一つの必要悪であったという。人々は生活の必要に迫られないかぎり，めったに自由を放棄しないものである。

第3部は中世後期および近世の市場経済時代の“西欧農業”をテーマとする本書の核心部分である。まず，人口史および物価史の成果を利用して，人口，物価および賃金の超長期の変動とその農業におよぼす影響を検討する。これは第1部のフローチャートによる相互依存の図式の具体化であって，(1)農業の繁栄・沈滞の局面転換の時期区分を設定すること，(2)繁栄・沈滞のそれぞれの局面における相対価格の変動の規則性を見出すこと，の2つがここでの狙いとなっている。

人口史および物価史の研究によって蒐集された統計データの検討から人口と穀物価格の超長期の変動は次のように要約される。

人口		穀物価格	
1150—1300年	かなり増大	1200—1300年	高
1300—1400年	急激な減少	1300—1450年	低
1450—1600年	ゆるやかな増大	1450—1550年	やや上昇
		1550—1650年	急激な上昇
1600—1700年	一定または遅々とした増大	1650—1750年	下落
1750—1900年	きわめて急速な増大	1750—1878年	上昇

これによると，両者の変動傾向の一致は明らかで，人口増大の時期には穀価は上昇し，人口減少の時期には穀価は下落している。これは，人口の増(減)——→需要の増(減)——→価格の騰(落)——→生産の増(減)という因果の進行から理論的に予期されるところで，農業の場合は生産の反応が緩慢なのがその大きな特徴となっている。もちろん，この他にも農産物貿易，他産業とくらべての農業の相対的有利性など多くの諸条件を考慮しらなければならないけれども，人口増加と高い穀価の時期は農業の繁栄期，人口減少と低い穀価の時期は農業の沈滞期としてよい。かくして，農業発展の時期区分は次のようになる。

1150—1300年	農業ブーム	1550—1650年	農業ブーム
1300—1450年	深刻な農業不況	1650—1750年	軽度な農業不況
1450—1550年	農業の軽度な回復	1750—1850年	農業ブーム

人口史については，著者はおおむね今日の通説をフォローしていると認められるが，論議の展開は常に十分説得的とはいいきれない節もある。例えば，著者が依拠する Bennett の人口推計は ヨーロッパ全域にかかわるものである，また Bennett 推計からは 17 世紀の人口停滞という結論は公平にみて出てきそうにない，等々の難点もあるからである。

相対価格の変動についての著者の論議は，おおむね農産物価格論のテキストブックそのままの援用であり，そこでは価格弾力性が主役になっている。価格弾力性の値の差から，価格変動の幅は上下とも穀物がもっとも大きく，以下畜産物，工業原料，工業製品の順に小さくなると主張する。ここから農民経済内部における資源配置の変化が導かれる仕組になっている。

12世紀中葉の西欧は広大な未開発の土地を持っていたし，中世前期を通じて次第に整備されてきた西欧農法の技術体系と経済的には非能率ではあるがしかし政治的には強力な荘園制の組織を継承していた。それはあたかもスタートラインについた走者の趣がある。ここに待望久しかった貨幣経済の復活と人口の増加がおきたのだから，12—13世紀に農業の未曽有の外延的拡大がおきたのはけだし当然のことといえよう。オランダの干拓，東ドイツの植民運動などがそれである。しかし，耕地の開発は林野の犠牲において進行したから，それはしばしば林野の放牧権と衝突した。マルク共同体は林野に対する既得権益を守るための先住農民の団結であったという。

特化や集約化を伴わない農業の外延的拡大はやがては収穫逓減の壁に突き当らざるをえない。13世紀の末には早くも反動の徴候が現われてきた。かくして，14—15世紀は深刻な農業不況，大量死亡，労働力不足による農業労働者の黄金時代をみることとなった。オランダは洪水や土壌浸食の被害を長く復旧しえなかったし，ドイツやイングランドでは廃村の続発をみた。耕種から畜産とくに牧羊への転換が各地で進んだ。

中世後期はまた農奴身分の廃止，荘園制から借地制への移行の時代でもある。これは，12—13世紀における開発のための労働需要の増大と14—15世紀における大量死亡による労働供給の減少がもたらした持続的な労働力不足に負うところが少なくない。

近世に入っても，農業の好況・不況に対する適応の姿は中世後期のそれとほとんど同様である。1550—1650年および1750—1850年の農業ブームの時代には，耕地の開発，畜産から耕種への転換，肥料の増投（一部の先進地帯では金肥の導入），農村家内工業の瀦小，農書の出版等がおきたし，また1650—1750年の農業不況期には，耕作放棄，土壌浸食による荒廃，耕種から畜産への転換，農村家内工業の拡大等がみられた。こうした多彩な農業の運動も相対価格の変化に対する農民の経済合理的な適応の帰結として一括説明できることが，豊富な価格統計によって巧みに論証される。しかし，不況期に増産された畜産物や家内工業製品に対する有効需要の問題については，何の検討もない。これは，生産，所得形成および支出の三面についての勘定の斉合性に対する著者の配慮の不十分さを示すものではあるまいか。もっとも，これは必ずしも著者だけのことではないようである。

中世後期の“西欧農業”の生産性の水準はまったく貧弱である。著者の蒐集した収穫統計によると，標準的な小麦の反当収量は5～6斗，大麦のそれは7～8斗，オートは6斗前後とみてよいようである。しかも，この低い反収の水準は16，17世紀からしばしば18世紀までも続いていたのだから，生産性の上昇もまた著しく緩慢だったわけである。しかし，もちろん，これが

“西欧農業”の全貌ではない。人口稠密なフランドルやブラバントでは，早くから集約農業が発達して，絶えず“西欧農業”をリードしていた。18世紀にかの農業革命の根幹ともなった New Farming は，この地方で14—15世紀に創始され，17世紀に入って完成されたものである。そうして，これは不況期の不利な穀物価格に立ち向った無名の農民達の創意の産物だったという。

巻をとじて，おそらくは訳者とともに，私はこう思わざるをえなかった。この一冊の著書とくらべて，われわれは身近な“日本農業”について果してどれほどのことを知っているといえるだろうか。

梅村又次

鎌倉孝夫著

『資本論体系の方法』

I

マルクス経済学は，近代経済学(ないし，「現代経済学」)とことなり，現実から遊離した理論研究のうえでのトピックスというようなものを重要視しない。というよりは，トピカルな問題も，研究史とそこでの問題解決の努力の積み重ねとして現に表面化してきたものである。そうした意味においても，近年，マルクス経済学の分野での，とくに『資本論』研究の分野でのトピックスは，理論の個々の範疇がとりだされて，その解釈が問題とされるだけでなく，経済学の体系，『資本論』体系全体が問題とされる傾向にある。このことは，理論研究の話題が少なくなって研究が停滞しているといった皮相な批評をもうけることとなっているのだが，そこでの真の意味は，そうした皮相な理解とはまったくことなった点にある。すなわち，個々の理論分野，とりわけ商品論，恐慌論，蓄積＝再生産論，競争論，信用論等で論じられてきた問題点が，問題を扱う方法自体を問うことまで深化され，それと同時に，問題領域が，前掲のような個々的範囲にとどまりえなくなってきたことなのである。『資本論』研究において，いわゆる宇野理論の体系との対立的論点が明白であるような論点に，このことは顕著になってきている。

また，いまひとつ指摘しておかねばならないことは，理論研究の進化は，『資本論』研究においては，二様の方向をとらざるをえなかったことである。一つは，理論を，それを成立せしめたイデオロギー的状況や，思想史的発展段階とは相対的に独自なものとし，そうした「状況」や「段階」は理論展開にとっての夾雑物をなすものとして，意識的にしろ無意識的にしろ排除しようとする方向である。二つには，一面第一の方向の反動ではあるが，さらにマルクスの方法それ自体の要請として，経済学に思想史的側面を方法的に加味した理解を加えようとするものである。いわば経済学における思想の問題をどう把えたらよいのか，という視点が，積極的にしろ消極的にしろ，ここでは考えの中に入れられざるをえなくなっている。

今日まで，いわゆる宇野学派とか宇野理論とか呼ばれる研究者は，当の宇野弘蔵氏をはじめとして，これらのことがらにきわめて明確に対応してきた。ことにこのようなことにたいする宇野理論のもつ方法意識は，良いにせよ悪いにせよ注目に値いするものである。というのも，従来のマルクス学は，すくなからず方法の問題を自明とし，その意識的具体化をあいまいにしていたきらいがあったし，そのために，一皮めくれば，まったく教条的方法理解が顔をのぞかせていたからである。このような，経済学体系のもつ方法をきわめて意識的に明白にしうるかどうかは，じつは経済学と思想，イデオロギーとの関連について，緊張をはらんだ明確な自覚が存するかどうかにかかっているといってもよい。その点で，宇野理論が，これに明白な対応を示したことに，やはり注目しなければならない。宇野理論の側から，そうした点から『資本論』を全体として方法論的にも問題にし，「方法」をきわめて内在的に展開することを意図したものとして，本書のもつ意義は大きい。また，本書は，いままで宇野理論の側からあまり充分な論究のなされていなかった，『資本論』の経済学史的位置づけが，明白になされていることにおいても，宇野理論の殷新の展開として興味深い点である。また，それは，「宇野経済学」の学史的位置づけにもなっているといえよう。

II

本書は，実際には，『資本論』第一部における重要な問題，すなわち商品論，貨幣論，貨幣の資本への転化論，生産過程論を貫く，基本的方法を，貨幣の資本への転化を中心とする「流通形態」論の視点から統一